

## 観能のいざない

## 能 通小町

(かよいこまち)

八瀬の山里で一夏安居(いちげあんご)・一夏こもつての修行)を送る僧が登場し、毎日本の実や小枝を持ってくる女がいるので、今日また来るようなら名を尋ねてみようと言って座に着く。女が登場し、木の実小枝を僧に届け、木の実尽くしの歌を謡う。僧が名を尋ねると、小野小町の霊であることをほのめかして姿を消す。僧が小町のあとを吊っていると、小町の霊が再び現れるが、一緒に四位少将の霊も現れ妨害しようとする。四位少将は、小町に恋心を持ち、「百夜通ってきたら会ってあげよう」という言葉信じて通ったものの、あと一夜というところで力尽きて死んでしまったのだ。四位少将の霊は恨みをのべながら百夜通いの様を見せるが、最後は小町・少将共に成仏して姿を消す。

## 狂言 棒縛り

(ぼうしばり)

主人は、出かけている間に盗み酒をしないよう、太郎冠者を棒に縛り付け、次郎冠者を後ろ手に縛っておく。しかし二人はそれでもなんとか酒を飲もうと企てる……

## 仕舞 玉之段

(たまのだん)

仕舞は能の一部を抜き出して紋付袴姿で舞うもの。玉之段は「海人」という能の一部。讃岐国志度の浦の海女は、龍宮に奪われた玉を探しに来た藤原大臣との間に子をもうける。海女は、玉を取り返すことができたなら、生まれた子を将来大臣にすると約束を取りつけ、決死の覚悟で海へ飛び込む。

## 能 杜若

(かきつばた)

旅の僧が登場し、都の名所は大方見尽くしたので、これから東国へ下ろうと思っていると述べる。美濃、尾張と下り三河の国に着くと、沢辺に杜若が美しく咲いているので眺めていると、一人の女が現れる。女は、ここは八橋(やつはし)と言って杜若の名所であり、伊勢物語で在原業平が、杜若(か・き・つ・ば・た)の五文字をそれぞれの句の上に置いて「唐衣 着つつなれにし 妻しあれば 遙々来ぬる旅をしぞ思ふ」と詠んだ場所であると教える。さらに自らの庵へと僧を招くと、装束を改めて現れ、この衣こそ歌に詠まれた唐衣、高子の后(二条の後)の御衣であり、この冠は、業平が豊明節会(とよあかりのせちえ)で五節の舞を舞ったときにつけた冠であると言っている。また、自分は実は杜若の精であり、業平は歌舞の菩薩が仮の姿でこの世に現れたものであり、その業平の歌に詠まれたことよって自分のような草木までも成仏することができたのであると語る。それから伊勢物語に描かれた業平の東下りを謡った謡に合わせて舞い、「序之舞」というしっとりとした舞を舞う。やがて夜も白々と明け始めると、杜若の精の姿も消えてしまった。

(宝生流職分 佐野玄宜)